

巻頭言

日本地域看護学会の活性化に向けた検討から
第26回の学術集会への思い

荒木田美香子

川崎市立看護大学 看護学部

日本地域看護学会誌, 25 (3) : 3, 2022

2021年度に宮崎美砂子理事長が学会の活性化に向けて、「次世代研究活動推進チーム」(現 次世代育成推進委員会)と「活動推進エンジンチーム」(現 実践促進委員会)の2つのチームを構成した。「次世代研究活動推進チーム」がリサーチアジェンダ24を提案したことは田高悦子理事が第25巻第2号の巻頭言で説明している。そこで、もう1つのチームである「活動推進エンジンチーム」の提案を説明させていただく。メンバーは、筆者がリーダーを務め、秋山正子理事、石橋みゆき理事、大木幸子理事、岸恵美子理事、北山三津子理事、田村須賀子理事、そしてオブザーバーとして宮崎美砂子理事長であった。

チームのスローガンを「1. 現会員を逃さない, 2. 新規会員の獲得, 3. 当事者や現場の方に魅力ある企画とは何か」とし、最初はブレインストーミングで話題を広げ、それを集約し、実現可能性を検討するというプロセスであった。既存委員会である広報委員会には会員獲得に向けてより幅を広げた広報活動、研究活動推進委員会にはより参加しやすい研修会、編集委員会には若手研究者向けのサービスの充実、学術集会には現場の実践家が魅力を感じる企画の検討をお願いし、委員会活動のなかで活性化を図っている。

残された課題については以下のような整理を行い、2022年度以降の活動につなげた。

(1) 現場参加型の学会をつくるための組織や仕組みを検討する臨時委員会を2022年度に起こすこと。これは、現在、実践促進委員会として大木幸子理事、秋山正子理事を中心に活動が進んでいる。

(2) 2022年度に、学生会員・ユースプログラム制度を検討し、理事会で具体案を検討していくこと。これは、個人的にはぜひ実現させたいことであり、今後、具体的な仕組みを提案していく。

(3) 他学会とのコラボレーションについては、コラボの目的、意義を明確にして、学術集会で理事会企画(学術的コラボ企画)として実施する。

また、第25回学術集会でもワークショップをもち、参加者がチームに分かれブレインストーミングでアイデアを出し合った。会員からの発想はユニークで楽しいひとときであった。その結果の詳細は、大木幸子理事が今後の議論に活用されると思う。このときに筆者が感じたことの1つは、特に大学院生・若手から中堅の人々は研究方法や研究推進という点で悩みをもっているのではないかということであった。これは、本学会員が現場の人よりも大学教員が多いという特徴があるからかもしれない。また、もう1つは学会員も個人の活動の評価を求めているのではないかということであった。これまでの表彰制度は、名誉会員という学会への功績、優秀論文賞という学術的な功績を称えるもののみである。しかし、継続参加表彰、継続発表表彰といったように長年学会を支えてきたことへの表彰もあってしかるべきではないかと思った次第である。

くしくも、第26回学術集会の集会長を務めることになり、活動推進エンジンチームで検討したことを具現化するのに四苦八苦している。特にシンポジウムやパネルディスカッションとして当事者、現場、本学会外からの研究者の招聘を行っている。また研究力向上セミナーとして、オンラインセミナーとハンズオンセミナーを企画している。そして、企画段階で苦勞しているが学部学生企画を検討しているところである。このなかで研究者グループや学生ネットワークがつけられることが夢である。